

すが、双方譲らず、入京を強行しようとする旧幕府側と、臨機の応戦やむなしとの薩摩藩側の判断で、午後五時頃開戦となりました。しかし、緒戦は旧幕府側軍が戦闘態勢を十分確保しておらず、見廻組が応戦するものの、すぐに退却を余儀なくされました。

伏見においてもほぼ同時に戦闘が開始しました。初めは一進一退の市街戦となりましたが、しだいに薩長有利のなかで奉行所への突撃とな

り、翌四日には、伏見市街から旧幕府側軍を退却させました。

長州藩は、京都伏見御香宮に第二中隊、毛利橋に第六中隊を派遣して、薩摩藩とともに退けています。届けられている死者は、第一中隊の後藤深蔵・相木岡四郎二名、負傷は一〇名とあります。「勅書御沙汰書願伺届等

控一」毛利家文庫一雲上三九／「輦下日載天」毛利家文庫六七八戌辰戦争一件六七)。

当初は、薩長側と旧幕府側両勢力による戦闘に近い状態でしたが、一月四日には、議定兼軍事総裁嘉彰親王をして征討大将军となし、錦旗・節刀を与えて薩長芸(※芸は広島藩のこと)を従わせ、参与四条隆調・参与助役五条為栄を錦旗奉行としたこと(『復古記』一九三〇年)、



「毛理嶋山官軍大勝利之図」(山口県立山口博物館蔵)



錦旗図

(山口県立山口博物館蔵)

ものが、双方譲らず、入京を強行しようとする旧幕府側と、臨機の応戦やむなしとの薩摩藩側の判断で、午後五時頃開戦となりました。しかし、緒戦は旧幕府側軍が戦闘態勢を十分確保しておらず、見廻組が応戦するものの、すぐに退却を余儀なくされました。

伏見においてもほぼ同時に戦闘が開始しました。初めは一進一退の市街戦となりましたが、しだいに薩長有利のなかで奉行所への突撃とな

り、翌四日には、伏見市街から旧幕府側軍を退却させました。さらに、家老荒尾駿河(成章)ら京都藩邸独自判断で、鳥取藩が参戦しました(『鳥取県史近世三』一九七九年／贈従一位池田慶徳公御伝記四一九八九年)。四日・五日の鳥羽街道富の森での激戦および伏見街道の千両松周辺での激戦は、新政府側にも甚大な被害が出ています(野口武彦『鳥羽伏見の戦い 藩府の命運を決した四日間』一〇一〇年)。こうしたなかで、旧幕府側の足並みが乱れました。まず、新政府側の軍勢を食い止めようと旧幕府側が淀城に入ろうとしますが、淀藩が城門を開くことはありませんでした。さらに翌六日、津藩は、勅書に従わざるを得ない事情に至った経緯を述べ、旧幕府側に訣別状を送り、攻撃を開始することとなります。

一月五日未明より、薩長両藩は淀城への進撃を開始、岩国藩も参加し、六日の山崎関門での激戦で重天錦見村万蔵が「八幡運糧ノ節眼ヲ打ち貫即死」しています(『吉川家周旋始末後記経健公御監國記』毛利家文庫七五維新記事雑録八〇)。非戦闘員として岩国藩に雇われていた人物でしょう。こうして、旧幕府側は敗走し、大坂城で再起を期そうとします。ところが、大坂城の徳川慶喜は、踏み留まつて戦つことを避け、一月六日夜、船で脱出して江戸に退き謹慎して救済を進めることになります。

江戸開城と上野戦争

Q 德川慶喜が江戸に退いた後に、長州藩士の果たした役割について、教えてください。



木梨精一郎(個人蔵)

Q 上野戦争とは、どのような戦いだったのですか。

河口・平潟口や北越方面も含めて事実上、当時の戦争全体の軍事計画を統括していたとも言えます(千田稔『維新政権の直属軍隊』一九七八年)。

大坂城を脱出した慶喜は、江戸に戻ると謹慎し、その救済を上野寛永寺の公現法親王(後の北白川宮能久親王)に依頼するとともに、側近高橋泥舟・山岡鉄太郎(鉄舟)を通じて、大総督府参謀の西郷隆盛に対して交渉を進めました。そして、ついに勝海舟との面会を実現し、三月十四日、江戸総攻撃前日に延期を実現させました。この背景には、英國公使パークスからの、江戸が戦場となることへの强硬な反対意見がありました。この意見を西郷に報告したのが、東海道先鋒参謀の長州藩士木梨精一郎です(石井孝『増訂明治維新の国際的環境』一九六六年)。こうして、四月十一日、江戸城は官軍に引き渡されましたが、それを認めない旧幕臣らが脱走して新政府側と対峙しました。

Q 德川慶喜が江戸に退いた後に、長州藩士の果たした役割について、教えてください。

大坂城を脱出した慶喜は、江戸に戻ると謹慎し、その救済を上野寛永寺の公現法親王(後の北白川宮能久親王)に依頼するとともに、側近高橋泥舟・山岡鉄太郎(鉄舟)を通じて、大総督府参謀の西郷隆盛に対して交渉を進めました。そして、ついに勝海舟との面会を実現し、三月十四日、江戸総攻撃前日に延期を実現させました。この背景には、英國公使パークスからの、江戸が戦場となることへの强硬な反対意見がありました。この意見を西郷に報告したのが、東海道先鋒参謀の長州藩士木梨精一郎であつたのです(石井孝『増訂明治維新の国際的環境』一九六六年)。こうして、四月十一日、江戸城は官軍に引き渡されましたが、それを認めない旧幕臣らが脱走して新政府側と対峙しました。上野戦争は大村が作戦を計画したことによく知られていますが、白



旧寛永寺黒門
現在も、当時の弾痕が、無数見られる。

次郎は、新たな軍事体制創出をめぐる議論のなか、軍防事務局判事として江戸に入りました。当時江戸の大総督府の下参謀として、実質的に西郷隆盛と大村益次郎が作戦・用兵全体を指揮する立場でした。

同年五月二十四日に、田安龜之助(徳川家達)を駿府藩七〇万石の城主とすることが決まり、徳川氏処分が最終的に決着しました。